
試練の果実

瀬田 和佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

試練の果実

【Nコード】

N1483H

【作者名】

瀬田 和佳

【あらすじ】

彼女に起こったのは、突然の異変——体から『実』が生えてしまう異常現象だった。苦悩と絶望の末、彼女にはどんな結末が待つか……？

試練の果実（前書き）

おことわり

こちらの作品は、随所に性的な表現、または倫理面から不快感を与えかねないような表現を含む可能性がございます。

ご覧になる際は、どうぞその点に十分ご注意ください。

試練の果実

いつも通りの朝です。 残念ですが、今日も私の体に『それ』は生えています――

初めて『それ』に気づいたのは、1ヶ月ほど前のことだったように思います。 しかし原因はわかりません。 とにかく私の体には、そのどこかに『実のようなもの』がつくようになってしまったのです。

それは長さ3〜4センチの細いへたの先に、7時間ほどかけて卵に似た形、かつ近い大きさの実をつけます。 1日に2、3個のペースで生えてきますが、経験上、芽を出し始める時間帯はまちまちのようです。

質感は、リンゴに似ているでしょうか――弾力には欠けますがそれなりに丈夫で、何かの拍子に潰れてしまったというようなことは、これまでにはありません。

匂いは特になく、むしろその外観はとても鮮やかなピンクとみずみずしいツヤに彩られ、例えるならトルコ石のような神秘的な輝きにさえ感じられます。 ええ、存在する場所さえ間違っていなかったなら、反対に私はそれに魅了されていたかもしれません。

皮膚とはこのことです。 この美しい実のせいで、私はどれほど心を痛めたでしょう。

無慈悲なことに、植物さながらのその実は、私の体の表面でさえあれば、生る場所をまったく選ばないようです。 背中、足首、臀部、胸、耳の裏、頭皮、指先……今までありとあらゆる場所にそれ

は実り、私の『人としての矜持』きよつじを脅かしてきました。陰部さえも例外ではありませんでした。肥大したそれが自分の局所にだらしなく実った時など、一人暮らしのマンションで、半ば発狂したように泣き叫び続けたものです。そう、あの時ほど、女である事の根源的な誇りを踏みにじられたような瞬間——他には思い当たりません。おそらくはこれから。

実生活においても、私の暮らしは大いに狂わされました。

まさかこんな得体の知れない実を晒して外を出歩くような気には到底なれませんか、最近までは出かける前に自らの手でそれを処理していました。厳密にはまぎれもなく『私の体の一部』であつたその実を、カッターを使って切り落としては、『ゴミ』として捨てていたのです。爪や枝毛を切り捨てることはどうしても同列に据えることなどできませんでした。いつも目に涙をうかべ、心と体を蝕む鋭い痛みに耐えながら、やり場のない恨めしさに満ちた刃を毎日走らせていました。

しかしそれも、しょせんは忌々しい実が虫刺されのような『収穫の痕』に変わるだけ——どうしても服から露出する首から上には、常にいくつかの、羞恥もはなはだしい鈍紫色の瘡蓋かさぶたが目立ちました。通勤や買い物の時間など、遠慮がちに突き刺さる視線に平静を装いながら街を歩き、合間には人目を忍んですすり泣く——それはもはや何度ずつ繰り返したことがわかりません。

事務職員として勤めていた会社も既に辞めています。勤務中もどんなタイミングでこの実が芽を出してしまうかと、しきりに鏡や触診によつてこっそりと自分の体をチェックしなければなりませんでしたので、とても仕事に集中することなどできませんでした。そしてわずかでも芽が見つかれば、その度にトイレに駆け込んで芽を切り取り、新たな生傷を作ります。ある種の強迫観念に突き動

かされたようなものです。面倒や恥ずかしさ、あるいはかえって残酷だった同僚の温かな心配はともかく、私の『異物』をついに周りに露呈してしまうことへの不安に耐えられなかったのです。

そして異変の初期のこと、婚約に近いところまで進展していた彼にも別れを告げました。『あなたと一緒に暮らしを想像すると、やっぱり不安が大きすぎる。悪いけど私たちの関係は、なかったことにしよう』とだけメールを送り、それから私の方から連絡をすることはなくなりました。その別れ言葉も、ある意味では本音です。今の私には、彼との将来像があまりにも暗く映るのです。今でも感情はその真逆だというのに。私の心だけは——以前のよう、いつでも、いつまでも一緒にいたいのに。

彼は本当にいい人でした。一方的に彼を裏切った私に怒る素振りもなく、一貫して私のことを心配するメールや留守電メッセージを何度もくれます。実に狂おしいことです——当初はその優しさこそが私が彼に惹かれた部分だったというのに、今はそれこそが最も私を苦しめる要素なのです。私は断腸の思いで、思いつく限りの辛辣な言葉を返信し、彼を突き放そうと試みました。

その度に彼に会いたい気持ちが募ります。でも、そんな彼にはまったく不釣り合いな姿、そして不誠実な裏切り者に成り果ててしまった今の私は、同時に彼に会いたくないと切に願うしかありません。

私はこれからどう生きてゆけば良いのでしょうか。陽光も爽やかなすがすがしい朝のベッドの上で、私は沈みきっていました。

恥を忍んでお医者さまにも行きましたが、答えは「見た事がない、対策もわからない」の連続でした。

つい4、5年前に両親と家業についてさんざん揉めたあけく家出

同然に上京してきた身なので、おめおめと親元に帰りさらなる迷惑を持ち込むなど、許されようはずありません。

新しい仕事を探すにも、もはや人と会うことすら苦痛となった私が就ける職業など、一体いくつあるでしょうか。ITも発達をきわめたこのご時世、コンピュータや専門分野の知識を磨いていない私には、家から出ずに生活を賄うことも難しいようです。

私はこれからどう生きてゆけば良いのでしょうか——今日もまた、いつも通りに同じ事で思い悩んでは、ため息をこぼすばかりの予定でした。

しかし、

『グーッ、グーッ』

いつもと同じような朝、いつもと同じ時間に届いたメールは、いつもとは違っていました。差出人はもちろん彼。でもその文面には、今まで必ずついていいほど含まれていた『会いたい』や『会ってくれ』の言葉はありませんでした。私はそれを見た瞬間、まさに心肝が凍りつくような焦りをおぼえました。

『もう我慢できない 家に居るのはわかってる 今からそっちに行く』

「……………」

私は動転しかけました。 どうして私にこもっている事が…？ それより、あれほどあなたを拒んだのに、どうしてまだ私を追うの……？

あれこれとまとまりのない考えが堂々巡りするうちに、玄関ドアの前に男性特有の重たそうな靴音を聞き取りました。

『ピンポン』

インターホンの音は鳴りましたが、私はビクビクしながら息を殺すのみです。もちろん出るつもりなどありません。

しかし彼のメールはどうやら文字通りのようでした。彼は新聞受けの蓋を押し開けると、そのわずかな隙間から家の隅々まで声が届くよう、力強く宣告してきました。

「おい、亜由美！ いるよな！ 悪いけど中に入らせてもらっから！」

合鍵でロックを外す音、チェーンが何かの道具でバツリと切られる音がするたび、私は気が狂いそうな程に恐怖しました。死に対する恐怖です。

私は今、昨日から放置していた左肘と右肩上部、そして寝ているうちに生えてきたとおぼしき右脛すねのもの、合わせて3つのたわわな実をつけています。それはいずれも露出こそしていませんが、パジャマの内側から極端にいびつな盛り上がりを作り、とても隠しようのないものでした。この姿を、他でもない彼に見られてしまう——それこそ私にとって、死ぬに等しく恐ろしいことなのです。

（やめて！ 来ないで！）

しかしながら、叫びたいことがすでに声にならないくらい、私は追い詰められていました。息もたえだえに、苦肉の策とばかりに布団にくるまり、ついに上がりこんできた彼からこの醜怪きわまる姿だけでも隠そうとするのが精一杯でした。

たくましい足音は、とうとう私の居る部屋の前までやってきました。部屋のドアにカギはついていますが、かけてはいません。

もつとも、かけてあったとして意味はなかったでしょう。そしてドアを開けた彼は難なく、ベッドの上に弱々しく佇たたずむ布団の塊を見つけてしまいました。

「……………」

私はそれでも黙ったままでした。もちろんこの期に及んでまだ隠れているつもり、などという訳ではありません。 どうしていいかもわからない、思考停止状態だったというだけです。 ただ、最後の防衛線であるこの羽毛入りの殻だけは剥ぎ取られてはならないと、手には普段では考えられないくらいの相当な力が込められています。

「亜由美……？」

1ヶ月ぶりに間近で聞いた、彼の低く澄んだ声。 名前を呼ばれたことでまだほんの少しでも嬉しいと感じてしまうことが、かえって大きな齒がゆさを生みます。

「……………」

私も何か答えたいのです。 だけどその後は—— 一体どうすれば……？ 『どうして来るの！？』 『あなたとは終わったと言ったはずよ！』 『帰って！ 警察呼ぶわよ！！』 …… かけるべき言葉はそのあたりでしょうか。 だけどその後、私が思い描く結末といえは—— どれも似たり寄ったりの悲しみを伴いそうで、自分からそこへ向かう勇気がどうしても湧きません。 やはり何を言えば良いのかわからず、ただただ殻に閉じこもるのみです。

しかしそこへ放たれた、実質的な彼の第一声—— それは私が想像だにしなかった言葉でした。

「なあ、亜由美。 実は俺さ、お前の『それ』の事はもう知ってるんだ。 『お前の態度がやっぱり変だ』 っと思って、最近のお前の身の周りを調べさせてもらったから。 ぶっちゃけると、ストーカ—— まがいの事もだいぶやったしな」

「……………！」

何という事…… 彼はすでに私の、もっとも知られたくなかったことを掴んでいたのです。 優しい声にぎっくりと袂えぐられたこの心

は、いよいよ地獄に叩き落とされたかのようです。

私は無言のまま——いいえ、もはや無意識のまま布団をはねのけ、背中のすぐ後ろにあった窓を開けました。8階のこの窓から身を投げ、ピークに達した屈辱、そして絶望の苦痛から逃げて楽になりたかったからです。

ためらうだけの理性さえ失くした私は、ごく自然に窓の外へと身を乗り出していました。

でも——

「亜由美ッ……！」

落下するだろう地点、誰もいない歩道だけを見て宙を舞いかけていた私でしたが、急に後から腰元を抱えられ、強い力で再び部屋の中へと引きずり込まれました。

『ドスンッ！』

私の体は固く冷えきった地面ではなく、柔らかく温かい何かにぶつかることと静止しました。彼の胸、久しぶりに感じられた『人の感触』でした。ああ、かつては当たり前のようにしか思っていなかった人との触れ合いが、これほど心地よいものだったとは——動悸は激しいままですが、それで思わず私も我に返ることとなりました。

後ろから手を回して私を抱きしめた体勢の彼は、左腕でしっかりと私の腰を固定したまま右腕を私の左肩まで手を回し、私の胸全体をぎゅっと抱きしめました。それはあまり力強くはないのに、私の心臓を息苦しいほどに締め上げました。

「バ力野郎……！　まだわからないか？」

彼は耳元で、少し荒れた声で語りかけてきます。

「お前の秘密を知ってしまったて、それでも変わらずお前に会いたかったんだ俺は。わかるか？　お前が『そんな』になると、ずっとお前と一緒にいたいと思ってたんだ……！」

彼は腕を解いたかと思うと、ベッドにだらしなく座る私の右横に

腰を下ろしました。そして私のパジャマをいきなり胸元から引き裂き、傷だらけの体はだけさせました。反射的にそれを手で遮った私に、彼は続けて言います。

「脱げ」

「えっ……！？」

「いいから、脱ぐんだよ……！」

いくばくかの優しいげな雰囲気は残っていても、彼のその鬼気迫ったような声色に対して、私はすっかり威圧されてしまいました。言われるままにパジャマを上下とも脱ぎ捨て、ついに自ら『あられもない姿』を晒しました。

辱めによる悔しさ、この姿を理由に彼に散々な態度をとってきた申し訳なさ——それは私の目から、まったく綺麗ではない涙となって流れ出しました。

「う……うっ……」

「泣くな。とはいえ辛いことだろうから、話さなくてもいい。返事もいらない。ただ、今から俺が言うことを聞いて欲しい」

私は必死で鼻をすすり、えづきを抑えようとしました。

「っ……！！」

「今でも何も変わっちゃいないよ。俺は、亜由美——お前が好きなんだ。多分、お前が考えてるよりもずっと」

穏やかさを取り戻した愛しい声は、耳、頭を通り越して、心の内側まで響く言葉を繋ぎます。

「その中でも一番好きなのは、ここだ」

彼は私の乳房……いいえ、どうやら心臓に手を当てて言いました。私の内面が、ということ saying ってくれているのでしょうか。

「ここも好きだ」 その指先は、私の唇に軽く当たりました。

「ここも」 2つのかさぶたが残る右手を握りました。

「ここも」 以前よくふざけてくすぐってきたわきの下をつつきました。

「それで、ここも。こうして見てみると、本当に綺麗だな」 右

の肩に実ったものを、慈しむように掬い上げて掌に乗せました。

嬉しかった。今の私を、『それ』ごと受け容れてくれることが、私は再び泣いてしまいましたが、さっきの涙よりはずっと清らかなものでした。

「俺はこれから、お前のために生きていきたい。あとはお前次第だ。もし良かったら、お前も俺のために生きてみてくれないか？」

私は大粒の涙もそのままのひどい顔でしたが、夢に終わりがけた彼からのプロポーズに、初めて言葉らしい言葉で答えることができました。

「……はい」

忘れていた笑顔も、ここでようやく取り戻すことができました。

いつも通りの朝です。相変わらず、私の体に『それ』は生えています。

ですが、私はもうそのことに思い悩むことはありません。少なくとも一人、ありのままの私を受け容れ、共に歩んでくれる相手がいるのですから。

しかも夫となった彼は、なんと以前にも増して優しく、頼りがいがある、私を愛してくれます。私は本当に幸せ者です。

「うーん、いつ見ても綺麗だな……この実は」

「ちょっと！なんで『それ』のことを先に褒めるのー！？私の立場はどうなのよ！」

「ははははは、悪い悪い。だって亜由美はねえ、綺麗なだけじゃないから。他にも褒めなきゃいけないところが多すぎるんだよ。きらないって」

「……もう！ 調子のいいことを！」

いつしか私は、こんな、実を介したおのろけまでできるくらいになりました。

「じゃ、これでおしまいっ」と

「うん、いつもありがとね」

毎朝、寝ている間に生えた実や芽を切る日課は、彼の役目になりました。ゴミ箱に捨てるなんてばちあたりだからと、切り取ったその実は彼が丁寧に紙に包み、彼がいつも使う鞆に入れていきます。どこか良い場所で供養してくれるみたいです。

余談ですが、人間というのは不思議ですね——ひとりでは到底できそうになかった困難なことでも、誰かと協力するというだけで驚くほど簡単になることがあるようです。彼と二人で形成外科や特殊メイクなどの勉強も少しして、実を切り取った後にできる傷をうまく隠したり、生え始めの芽を極力目立たないようにする方法も見出しました。これで私は一日3時間くらいの外出やパート程度になら耐えられるようになり、今は張り切って仕事に精を出しています。

「それじゃ、行ってくるね」

「ああ、いつてらっしゃい」

彼は今日、仕事はお休みです。仕事に出かける私を、とても癒される笑顔で見送ってくれます。私が昼ごろに帰ったら、午後は二人でお出かけの予定です。

彼の気遣いもあって、私達は私がもといいたマンションで暮らしています。マンション前の人通りのある歩道を、今の私はお気に入りワンプールで大手を振って歩けます。

ふと見上げれば、8階のベランダにはニッコリ笑って手を振る彼が——私も少し控えめに手を振り返してまた歩きます。

この実のせいではないぶん悩んだけど、彼と今のような関係でい

られることを思うと、むしろちょっとだけ感謝することもあるくらいです。

今や、これはもしかして私に与えられた『試練』だったんじゃないか、果たして私が他人の優しさをどれだけ信じているのかを試すためのものだったんじゃないかとさえ思うこともあります。

そう、この姿を他人に明かして受け容れてもらう努力をするか、あるいは独りで悩みを抱え込みながら他人を遠ざけて生きるか——そんな、私の心の根元が『人を信じられる』ように出来ているかを試すべく、大きな痛みと苦悩を伴う選択を迫ったんじゃないかと、これはさすがに、彼には笑われてしまいました。「いくらなんでも、人が好_よすぎる」って。

でも、私は本当にそう思ったんだよ？　いいえ、たとえ嘘でも、そういう事にさせて。

『人は一人では生きていけない』という言葉、私は信じます。なぜなら私自身、彼という『他の誰か』へと向ける思いこそが、いま私が生きるいちばんの動機なのですから。

『試練の果実』と自ら名づけたこの実が、あらためてそう気づかせてくれたのです。

最愛のあなたへ——ずっとずっと、一緒にいてくださいね。

·
T
H
E

E
N
D
·

試練の果実（後書き）

いかがだったでしょうか。

どうやら少し小説の世界に踏み込めば、「書きたいものではなく、読みたいものを書け」という言葉が常識となっているようですが、これは考えれば考えるほど難しいことだと感じます。

この作品はその言葉にできるだけ沿って手をつけてみたつもりですが、終わってみればやはり、漠然と『まだまだ』といった印象が否めないと自覚します。

このような未熟な作品ですが、せめて皆様のご助言・ご批評により、クオリティを高めることができれば、と考えております。

最後になりましたが、全文に目を通して下さった方々、本当にありがとうございます。

次ページはエピローグというよりは、こちらとは異なる視点での結末を描いたアナザーストーリーの立場の章となっております。

ハッピーエンドがお好みの方は以上をもちまして完結となさることをお勧めいたします。

隠されたエピソード（前書き）

おことわり

こちらには性的な表現、もしくは倫理面から不快感を与えかねない表現が含まれている可能性があります。

どうぞその点を十分にご了承ください。

なお、このエピソードは物語全体のイメージを一変させるものであるのと、実質『彼』を中心としたアナザーストーリーの位置づけでもあります。

「試練の果実」本文のみでもれつきとした完結でありますので、ハッピーエンドで良しとされる方は、こちらは読み進めない事をお勧めいたします。

隠されたエピソード

亜由美……ゴメン。

ベランダから揚々と歩いて遠ざかる亜由美を見届けると、俺は一目散に自分の部屋へと戻った。まさしく、引き寄せられるように。

こんな事になったのも、すべて『あの時』の気まぐれだった。

いくらなんでもおかしいとは思っていた。事あるごとに『ずっと一緒に』と口癖のように並べていた亜由美がいきなり別れを切り出すんだから。だから俺は彼女の周りを調べて、彼女に何か俺に言えない問題に苦しんでいるんじゃないかと考えたんだ。

休日や仕事終わりには極力亜由美の行動を追った。言葉は悪いが、ストーカー行為そのものだ。ただその甲斐あってか、思ったよりも早い段階で成果は得られた。ある日の夜、案の定亜由美はおかしな行動を見せた。かなり几帳面なはずの亜由美が、禁止されているはずの前日夜のうちにゴミを出しているのだ。それに何だ、あの顔——暗くてわかり辛いけど、明らかに痛々しい注射跡のようなものはいくつか見える。

これは本当にただごとじゃなさそうだと思った。彼女が去った後、俺はあたりに注意を払いながら、こっそりとそのゴミ袋を回収した。

人気がない場所に移動して袋を開けてみると——紙くずに混ざって、なぜか生ものらしき『実のようなもの』が何個か入っていたの

が相当に目を引いた。果物にしては見たこともない外観だし、第一あの亜由美が、これを生ゴミでなくふつうの家庭ゴミとして捨てているのも腑に落ちない。とりあえず爪で亀裂を作り、中ほどからそれを二つに割ってみた。思えばこれこそが分かれ目だった。するとどうだ、今まで特に何の匂いもしていなかったその実らしきものから、喻えようもなく芳しい香りを感じた。思わず、ここが真夜中の路地裏だという事も忘れて、花畑に寝転がるように大の字で倒れこむところだった。あふれんばかりの芳醇さのなかに、どこか懐かしいような匂いを含んでいたようにも思った。わずかに汁気を含んだみずみずしい果肉も、外側に負けず劣らずといった、思わず吸い込まれそうになる、魅惑の桃色と輝きに満ちていた。

常識や理性はこのときすでに崩れ始めていたようだ。少しも我慢するつもりなどなかった。鼻息荒くその実をひと齧^{かじ}りし、数度咀嚼^{そしゃく}した。

実を一口食べた、たったそれだけ。なのにその時の俺の感情はもう、美味だとか、そういったものを飛び越えて、間違いなく自分の意識する『最高』のイメージを軽く振り切ったような感覚に占領されていた。

漠然とした心地よい幸せを感じられるほろ酔いの感覚……血尿が出るほどの苦労の末に仕事を成し遂げた時の達成感……亜由美と愛し合う至高の瞬間……

あらゆる意味における絶頂のイメージさえ、その瞬間に感じたものの前には足元にも及ばない、とさえ思った。

急に自分の体が軽く健やかになったようにも感じるし、何より頭の中がとても整然としているように感じる。細胞の一つ一つが、俺自身に喜びを伝えてくるように躍っている——そんな感覚すら大げさじゃない。もはや全身が『性感帯』にでもなったように、内外からのあらゆる刺激が、その時の俺の精神を天国にも似た幻想的な空間へと導いた。気づけば俺は人一人通りそつもない路地裏で、夢精して朝を迎えていた。

実を直接食べたことと関係があるのだろうか——俺はなぜか、根拠もないのに、亜由美がその実を、自身の体から生んでいるのではないかと直感した。我ながらバ力な事を……とは思わなかった。実際、後付けの理屈を考えるにつれて、直感に対して矛盾がないように思う。しっかり者の亜由美がこの実を生ゴミにしなかったのは、せめて爪や髪の毛のような普通のゴミとして扱いたかった『プライド』のようなものだったんじゃないか……？ それにあの時のあいつの顔——あの注射跡に見えた部分から『実』が生えていたとしたら……そう、昨晚の現実離れしたトリップぶりが格好の前例となつて、これほどの飛躍した考えも想像の範疇に収まった。

その時から、俺はやっぱ『亜由美なしでは生きていけない』と思うようになった。

——俺は自分の鞆から、合計4つの実を取り出した。そして、目にしただけで昂る胸中、湧き出してくる生唾を、3回の深呼吸分だけ我慢したのち、獣同然に夢中でかぶりついた。

何度経験しても飽きることなどない最高の感覚を享受するために。

夢中で亜由美に実った果実をむさぼりながら、俺は泣いていた。大きな罪悪感によつてだった。

俺は、お前にプロポーズした日、最低な嘘をついたんだ。

本当にすまない。あの時、俺がお前の中で『一番好きだった』のは、すでに……お前が死ぬほど嫌っていたあの実が変わってしまったんだ。

「お前が『そんな』になろうと、ずっとお前と一緒にいたいと思

つてた」と言っただが、それも語弊があつた。『そんな』だからこそ、俺はお前から離れたくないと考えてたんだ。

女性があんな目に遭うことの辛さ、男の俺にもほんの少しは想像できるつもりだ。あの日お前が突然身を投げようとした時も、だからこそ止めるのが間に合つたのかもしれない。

でも、本当にすまない。それ以上に、『もつたいない』という意識が先にあつたんだ。あまつさえ弱つたお前の心につけこむように、「お前のために生きる、だから俺のために生きてくれ」なんてセリフを悪びれもせず吐いた俺は、誰がどう見ても最低で姑息な男に違いない。

そして最も救えないのは——最低を承知で、それでもいいから実を食べていたい、だから亜由美と別れたくない、としか考えていないことだ。

亜由美と一緒に居るためなら、俺はどんなに優しくもなれるし、全力であいつを守ることを誓える。ただしその動機はもはや、『実』という見返りのためだ。あいつ自身の魅力^あだつて決して^あ褪^あせてなどいない——でも、この実の絶対的な抗い^あのような依存性の前にはどうしても霞んでしまうんだ。

これが正直な気持ちだ。 本当に、すまない。

4つの実は、あつという間に俺の中に納まつた。ボロボロと涙は流れるままだが、反面、頭は冴えている。

『相思相愛にハッピーエンドはない』と言つたのは確かヘミングウェイだつたと思う。悔しいが、少なくとも俺達にとってはまっ

た酷的を射た言葉だった。

亜由美は本当に俺のことを慕ってくれる。それが俺には何より痛い。

でも、そのかわり俺は彼女へのせめてもの誠意として、一つの覚悟を決めている。双方の『事実としての』ハッピーエンドは無理でも、どちらか一方が犠牲を払うことで、片方の『主観的な』ハッピーエンドであれば実現可能——そう考え、実践しようとする覚悟だ。

やることは簡単だ。亜由美自身を愛している俺を演じるだけ、それだけのことだ。それで亜由美だけは今後も幸せに暮らすことができるはずだ。ただしそれは一生続けなくてはならないし、絶対に途中で悟られてもいけない。これは、この実の虜となつてしまった俺が生涯をかけて背負う十字架だ。

しかし、ついさっきまで泣いていた俺は、今は満面の笑みを浮かべ、ほぼアトラダムに手足をバタつかせながらフローリングの床を泳ぎ回っている。実の効果は最高潮に達している——夢のように幸せな気分だ。

マンションの中に居ながらにして極楽浄土を飛び回る俺は、その間にも『亜由美を喜ばせるための嘘の言葉』が、何万通りも頭に浮かんだ気になっていた。

ふいに、その中の一つを抽出し、開き直りと陶醉とに満たされた胸の中ではつきりと唱えてみた。

愛する人へ——いつまでも、あなたと共に。

『試練の果実』

THE
END

隠されたエピソード（後書き）

いかがでしたでしょうか。

皆様からすると、どうにも粗の目立つ駄文ではないでしょうか。

自分ではなかなか気づきにくいので、もしよろしければご批評などをぜひ頂戴したいと思っております。

最後になりましたが、本文ともども全文に目をお通しくださり、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1483h/>

試練の果実

2010年10月8日23時13分発行